

アンヌ・レエとイヴォンヌ・ルフエビュールとの対話 抜粋 (ル・モンド・ドゥ・ラ・ミュージク 第88号 1986年4月)

イヴォンヌ・ルフエビュール (Y.L.)

[...]ご存知でしょうけど、私はとっても年寄りなの。

アンヌ・レエ (A.R.)

アラウよりずっとお若いと思います。

Y.L.

あら、アラウはいくつだったかしら？

A.R.

80歳です。彼よりお若く見えますよ。

Y.L.

私は85歳。でも、それは禁句。フレディが生きてる時、私はしっかり年齢を隠していた。レコードジャケットに、ほんの幼い頃ドビュッシーに会いに行った、と書いたのも同じことね、当時コケティッシュでかわいい女だった私は、実際より20歳は若く見えたはず、私は何歳なのか、人に絶対知られたくなかったの。でもフレディも逝ってしまった今は、そんなことをして何になるの、年齢をなぜ隠すのかしら？けれど私は、とても若い生徒たちには年齢を教えないの、彼らが私と一緒にまだまだ長く歳を重ねられると思ったほうが素敵じゃないこと… 医者たちが言うのよ、「あなたは100歳まで大丈夫ですね、若い娘の心臓と若い娘の血圧、完璧な肺をお持ちだ」と。私はまるでとんでもない若さの40歳みたいね。お生憎さま、だってそうでしょ、私は死ぬより他に望みは無いの、あの人と一緒にどこかに行きたいのよ。

[...]私はピアノを4歳で弾いたわ！[...]とても文才があったから、母はいつも、私が作家になるだろうとか、女子高等師範に行って教授資格を取るだろうと思っていた。だから、突然、抗しがたい天職を音楽に見出してしまったことで、始めは母をひどく失望させたわ。

母にこう言いに来た先生がいたわね、「こんなに音楽好きなお嬢さんは見たことがありません。休み時間に、遊びに行かないで、ピアノに向かって即興演奏してるんですから。」私は自分の作品を作曲していた。「何か弾いてちょうだい」と言われれば、私は「これはベートーヴェンのよ」とか「ショパンのよ」とか言うのだけれど、それは私の曲だったの。8歳半の私はこんな感じで、一家はサン・マンデに住んでいた。知り合いにレオン先生というお医者さんがいて、その方の二人の娘はマルモンテルのところや、もうコルトーのところで勉強していた。彼が言ったの、「この子をマルグリット・ロンに聴いてもらおう」って。私を連れて行ったら、彼女はすぐさま、これは天才だ、と大騒ぎ、「こんなに才能のあるお嬢さんは見たことがありません、この子に音楽をさせなかったら大損害ですよ。」当然、彼女は私が大好きだったサン・マンデの先生なんか首にしてしまい、私にパリ国立音楽院を受験させたの。最年少でソルフェージュのクラスに合格し、1回でメダルを受け、主席だった私は、最年少でピアノの準備クラスへ。1等のメダルを受けて、コルトーのクラスに入って、13歳で1等賞を取ったわ。和声のクラスを受講したのは、母が、ピアノを演奏したりアメリカで契約をしたりすることは結構だけど、私が神童面でしゃしゃり出たりしない賢い子にならなければいけないと思ったからよ。

[...]バカロレアは諦めたわ、もうそういう年齢だったし、勉強もそこそこできたけれど、週に2回か3回は音楽院に通っていたから無理だった。それにサン・マンデに住んでいたからね。母は言ったわ、「エクリチュール(作曲書法)のクラスに入りなさいよ。」和声、対位法、ピアノ伴奏、スコアリーディング、移調。音楽院で一番素敵だけど一番難しいクラスで、たくさん試験があるの。パス課題が与えられて、それをやらなきゃならないし、与えられた歌も初見で歌わなければならない…そこで私は大儲け、ピアニストだってことを知らずに審査員がモーツァルトのソナタを課題に出したの。16歳だった。私はすでに和声の賞を取ってたわ。私は移調して、自分の「ウィリアム・テル」のスコアを試奏した。私にこう言った審査員が一人いたわ、「気をつけて！ホルンはG管です！」私は1回で合格、また一つ賞をもらったわ。

それからコサドの対位法のクラスを受講したわ、素晴らしい先生でエクリチュールの勉強をたくさんしたの。[...]そしてなおざりになっていたピアノ

ノをまた始めた(いずれにせよ戦争があったのよ)こう考えてまたピアノに向かったわ、「私には才能がない、作曲家としては無能だ、成功しない。」メチエ(専門的技量)があれば、常に交響曲やソナタを作れるし、それは難しいことではない。でも、私は自分に対して厳しかったので、ピアニストでいたほうがいい、と思ったの。私は実際には何も知らないまま1等賞を取って音楽院を卒業した。こう言われたわ、「崇高な美の音楽的感動を巻き起こす、素晴らしい熱情ソナタだ。」…個性は強かったけどメチエはなかったわ。

A.R.

あなたはピアノとどう関わってきたのですか？

Y.L.

[...]ピアノにはいつも夢中だった。でも、私は何事も自分でやったわ。コルトーは若すぎた、と思うのよね。何でもそらで知ってる幼い娘に感心し過ぎていた。母は重大な技術的欠点があることに気づいて言ったわ、「先生、イヴォンヌに復習コーチをつけなければいけませんわ。」「でも」と、彼は言ったの、「イヴォンヌには手をだしてはなりません。この子のなすがままにまかせ、自身で上達させるのです。」その結果、イヴォンヌはリストの「超絶技巧練習曲」、「メフィストワルツ」とかなんでも弾いたわ。でも、批評的精神が目覚めてきたら、お話にならないことがわかるでしょ。だから、全部やり直し。結局のところ、私は誰の生徒なのか？イヴォンヌ・ルフエビュールのよ。

私には教育が欠けてるの。マダム・ロンは何も教えてくれなかった。彼女のクラスに一年残ったけど、そのあと、たくさんやるべきことがあった…でも安らかにお眠り下さい、故人の悪口は良くないわね、とにかく、両親に、この子を音楽に進ませなければ駄目だ、と言ってくれたのは彼女なの。そのことには感謝しなければならぬわ。文才のある少女と、女優が作家になりたかったのにすべてを子どもたちの犠牲にしてしまい、その娘が同じ道を継いでくれると思っていたとても聡明な母親にとって、これは一大決断よ。音楽にその計画を覆されて、母は、やはりちょっとは狼狽したわ、おわかりよね？

A.R.

で、あなたご自身はどうしたかったのですか？

Y.L.

何をやりたいのか、まだわかっていなかった。私は、文学も哲学も、政治にだってとても興味があったので、本はたくさん読んだわ。でも結局、9歳の時以来、これほど私の人生そのものになっているのは音楽よ！学生生活、教師としての生活。とても若くしてエコール・ノルマルの教授になってしまったけれど、ちょっと若すぎて、教育に身を割き過ぎたわ。フレディ(当時はまだ結婚していなかったけれど、もう知り合っていた。幼なじみのよ)は、私が演奏することを望んで、多くの時間を教育に費やすのを残念がっていたわ。でも、私自身が本当に完成されたものではなかったから、ある意味自分の生徒でもあったの。生徒たちには、自分のために私の習得した経験を与えよう、と、自身に言い聞かせた。生徒それぞれのケースが興味深いわ。

[...]実は、私は何よりもまずベートーヴェン崇拝者。私がほんとに幼い頃(11歳だった)こう言ってくれたのはフォーレ、ガブリエルさんのよ、私があるソナタを演奏したのを聴いて、「この子はベートーヴェンのために生まれたのだ」って。ベートーヴェンは私がおの中に一番入りこめる作曲家なの。そこには情熱と苦悩、闘争があり、そして、ドイツ語で言えばフロイデ(Freude)、様々な苦悩にもかかわらず到達した、この歓喜があるのよ。彼はお手本、模範、絶望の時にあっても…といっても、私は幸福に生きてきたわ、私の人生はずっと恵まれていた。よく勉強したのも本当だけど、立派な両親を持っていた。母は、私の天職を理解してくれたし、父はまるで天使だったわ。私みたいなかわいい小さな金髪娘は、結婚して静かな暮らしをしなければならなかったはずなのに、母は勉強を続けたいという私を理解して、素晴らしい支えになってくれたの。

<p>A.R. 音楽との関わりで葛藤は一度もなかったのですか？</p> <p>Y.L. 音楽的な面では、悩んだことは一度もないわ、私は、心底から音楽の才能があったの。悩みの種はこの手よ、このとても小さな私の手。男性的な演奏の時はいろいろ骨が折れるんだけど、___私の演奏スタイルは男っぽいわ、私は大きくて力強い演奏しか好みじゃないから___、私のドビュッシーのディスクを聴いてもあなたはほとんど気がつかないわよ。ドビュッシーの演奏ではいつも輝きを少し抑えるの。</p> <p>A.R. そこで私の質問ですが、一度も困ったことはなかったのですか？</p> <p>Y.L. 音楽で本当に苦しんだとは言えないわね。まだ私が完璧でないということには悩んだわ、今もなお、私は完璧を追い求めているの。私の情熱は完璧を目指すことにあるの、やろうとしていることに少しでも近づくことよ。</p> <p>A.R. 楽曲をどのように勉強するのですか？</p> <p>Y.L. まず譜読み。特に難しい箇所がわかったら、その問題をどうやって解決するか試す。私は、秘訣ならたくさん知ってるわ。手の小ささをカバーするため、アレンジの方法を工夫したことで、有名なよ。生徒の一人が言ったわ、「ルフェビュール先生、あなたはアレンジの女王さまです」って。今日、生徒がひとり来たわ、ピアノについて素晴らしい才能のあるギリシャ人男性で、すごく大きな手をしているの。彼に言ってやったわ、「あなたには私のトリックは必要ないわね」と。でも女性たちは、___私の生徒の大部分は女性なの___、私が彼女たちにアレンジの方法を見つけてあげると、とても喜ぶわ。</p> <p>A.R. ペダルの使い方は？</p> <p>Y.L. ペダル。それこそ私の得意技ね。ペダルをぐっと深く踏み込んで、そして徐々に戻すやり方があるの。ドビュッシーを弾いていて、低音が持続しているのに、私が高音を自由に解き放つのに、きつと気がついたわよね。うまく説明できないけど、体の使い方なの。練習し、よく聴きながら、私はこのテクニックを身につけた。生徒に伝授するのはとても難しいわ。ピアノで大事なことは音色よ、ペダルは私たちの大きな助けになるわ。完全な輝きが欲しいのなら、ペダルをよく動かさなければ。私の右足は始終震えているはず、演奏する時はロングドレスで良かったわ！生徒たちに、私と同じペダルのセンスを持つとは言えないけれど、彼らもそのうち多分習得するでしょう。 とにかく、努力を怠ってはいけないのよ。私は完璧を目指すことに夢中なの、より粒の揃った、さらに美しい音色で、乱暴になることも籠もることもなく力強く、しかし硬くならないように。</p> <p>A.R. それでは、ピアノとは？</p> <p>Y.L. 私の人生そのものね、うまく言えないけど。ベッドから出ると、ピアノに向かうわ… […]ピアノを弾かないなら、私はオーケストラを作るわ。ピアノから引き出すことのできる、その音色にだけ興味があるの。もしも私が男の子だったら、指揮者になったでしょうね。それに、ダンディの指揮法のクラスも取ったのよ。あいにく彼は女嫌いの指揮者でね、私が指揮できるようになっても、女性には指揮させてくれなかった。 でも、私は指揮者と結婚したわ。フレディはフルトヴェングラーに匹敵するくらい指揮者だったのよ。フレディ、彼はすべてだった、生き字引よ、私は彼からすべてを学んだわ。</p> <p>A.R. あなたはついに結婚されたわけですね。</p>	<p>Y.L. 40歳過ぎになってたわ！私たちは前からの友だちで、とても良い仕事仲間だった、そして突然、天からの声があった。それが恋だったわ。私たちが離れ離れになってしまうと、私は彼なしで生きていけないのだ、と気づいた。 […]私たちは25歳で結婚したの。暗い陰や、諍いひとつなかった。彼は私を甘やかして過ぎたわ。</p> <p>A.R. あなた方は一緒に音楽をなさったのでしょうか？</p> <p>Y.L. いつもよ。全部覚えてるわ。私は、彼の書いたものや、彼が私のために作曲したカデンツァを見てるの。彼が聴きに来ないコンサートをしたことなどなかったわ。</p> <p>A.R. 彼はあなたの演奏スタイルについてどう言っていましたか？</p> <p>Y.L. 彼は批評してくれた、それには一番感謝しているわ。私はコルトーにこう言った、彼は私を上達させてくれた最高で唯一の人です、と。カザルスもデュカスも何も言ってくれなかったけれど、ただの若僧だったフレディが、ある日私に言ったのよ、「あなたの三連符はあまり上手くないな。」私は思ったわ、「図々しいわね！22歳の若僧のくせに、私の三連符があまり上手くないなんて言うとは！」でも彼が立ち去ったら、私は気づいたわ、全く彼の言うとおりで。私は彼に電話した、「フレディ、あなた、あの三連符がみっともなかったことがわかるのね。さあ、あなたの言いたいように、すべて私を批評してちょうだい！」私に、あえて真実を言ってくれた、たった一人の人のよ。</p> <p>A.R. そしてあなたは、ご自身の演奏スタイルをどう思いますか？</p> <p>Y.L. 人生において、私は優柔不断の権化。自分の服も買えないし、肘掛椅子も選べない、結婚の決断をするのにも20年以上かかったわ。でも音楽については、私は正しいという絶対的確信があるの。他の人たちが間違っているとは思わないけど、私の確信は、やるべきことには1分たりとも躊躇しない程よ。演奏の出来については疑いがあるの。[…]いつも疑ってはいるけれど、時折少しは上手くなっているのよ。しかし、私たちって何者なんだろうね？何者でもないわ。ミヨーは、ちょっと行き過ぎただけけど、こう言ってるの、「演奏家たちよ、君たちは音楽の下僕だ」、これはあまりエレガントじゃないわね。でも私たちは、音楽への奉仕者だし、音楽を裏切らないかと怖れているわ。私は、個性が激しいので、時々それに引きずられて、速く弾きすぎてしまうの、でも100歳になったら、非の打ち所のない演奏をするつもりよ。 フレディが病気になってからは、すべてを抛って彼の看病をしたわ[…]。ご存じよね、孤独は悲劇よ。彼が亡くなる前は、深く考え事をするため、しばしば彼から離れようとしたものよ、一人になる必要があったの。今は、もはや誰とも会いたくないわ。音楽がなかったら、もうこの世にいられないと思うの。</p> <p>A.R. そしてピアノがなかったら？</p> <p>Y.L. 音楽はピアノの中に隠されている。音楽は私の隠れ家。多分、私は恵まれすぎていた、幸せすぎた。私にひどいことをした二、三の下種野郎に出くわさなかったとは言えないけれど、音楽のおかげで、周りに支えられていた。私は、音楽なしに、周りの人々を失わずにいることができたかしら、と思うわ。愛されていたのは、私ではない、って気がするの。フレディでさえ、いったい私は何度彼にこう言ったことかしら、「あなたの愛しているのは私じゃないわ、私のピアノなのよ。」</p>
--	---

(訳：根岸一郎)